

## Contents Vol.217

2019.3.31

### 02 ごあいさつ

### 03 NEWS

- 1 入試改革
- 2 公務員試験
- 3 キャリアフェスタ
- 4 4団体、5個人に学長特別表彰

### 06 トピックス

- 1 教育学部退職教員 最終講話
- 2 退官教授最終講義
- 3 大阪体育学会を開催
- 4 スポーツ・アドミニストレーター集結
- 5 教育学部シンポジウム
- 6 スキー実習
- 7 ゴルフ実習
- 8 博士論文発表会
- 9 修士論文発表会
- 10 体育学部卒論発表会
- 11 教育学部初の卒論発表会
- 12 スポーツキャンプ15周年記念大会
- 13 第29回くまどりロードレース
- 14 硬式野球部女子創部10周年記念式典
- 15 院修了式、学部卒業式

### 14 コラム 窓

15 我が青春の記 村上なおみ 陳 洋明



## 悔いのない学生生活を



浪商学園理事長  
野田賢治

## オリンピック史から学ぶ



大阪体育大学学長  
岩上安孝

新入生の皆さま、大阪体育大学入学おめでとうございます。

これから4年間の大学生活を過ごす熊取キャンパス、教育・研究・スポーツ関連施設を始め、本学の創設に力を尽くされた先人達の記念碑、卒業生からの奇贈品、教育後援会からの樹木など、本学のこれまでの歩みが刻まれております。探索してみても如何でしょうか。

中央棟の正面玄関入口には、1964年東京オリンピックを象徴する3枚のポスターが掲示されております。皆さんが広く体育・スポーツを学ぶ上で理解を深めなければならぬオリンピック、その一端がポスターから垣間見ることが出来ます。

一つは「聖火を掲げて走る姿」、ギリシャ神話では、プロメテウスがゼウスの「神聖な火」を人類に与えたとされ、近代オリンピックの

ピックでは、ゼウスの神殿（オリンポス山）で11名の巫女により太陽光線による採火式が行われております。なお、「聖火」は1928年の第9回アムステルダムから導入され、今日の聖火リレーは、1936年の第11回ベルリンから行われるようになりました。

二つ目は「両腕を翼のように広げた競泳バタフライ」、この図柄は、「より速く、より高く、より強く」を掲げるオリンピック・モットーに因み、世界のアスリートが人類の可能性の極限に挑んでいく姿を表現しているのでしょうか。

三つ目は、「五輪のマークが日の丸を支えている」、左から青、黄、黒、緑、赤の輪を重ねた五輪のマークは、ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカ、アジア、オセアニアの五大大陸の連帯を表し世界平和への願いが

人の思いが、大阪体育大学の教育の源です。50年以上経た今も色あせることなく脈々と受け継がれています。

今、社会では、予測不可能な未来で活躍できる人材が求められています。すなわち、時代の変化に対応し柔軟な思考力で社会を支え、自ら考え、臨機応変に社会改革に挑める。そんな人が求められています。まさに、アスリートに求められる資質そのものです。

4年間というのは長いようですが、終わってみれば「あっ」という間の出来事になってしまうに違いありません。大阪体育大学の学びが、立派な社会人に成る近道だと信じて、悔いのない1日1日を送っていただく事を願って挨拶とします。

体育・スポーツの最先端におられたお2

込められております。

二度目のオリンピックが近づいてまいりましたが、オリンピックを楽しむ上でも、第1回は何年に何処の国で、日本の参加はどのような競技が行われていたのか、その後の競技種目や男女の変遷、育成・強化へのスポーツ科学の導入、オリンピックと時代の背景などを、パラリンピックも同様に多面的視点から紐解いてみては如何でしょうか。

今年は各競技で、代表選考をも兼ねたテストイベント大会が数多く開催され、皆さんと同世代の若者が凌ぎを削り合います。4年間の大学生活、自らの目標をしっかりと胸に刻み、前向きに帆を進めていって下さい。

# 入試改革

## 「スポーツ系大学」だからこそできる

本学では、来年度の入学生を対象とした2020年度入試より、新たな入試制度を導入します。特別総合型選抜（旧スポーツ特別AO入試）では、優秀なアスリートを選抜できるように新たに「DASHアスリート特別総合型選抜」を導入するほか、総合型選抜（旧AO入試）では、従来の3つの型（アスリート型、自己推薦型、卒業生子女型）に加え、大学院進学も視野に入れたスポーツ科学の研究者を目指す「スポーツ科学研究型」を新設します。また、従来の一般選抜では「1教科+体力判定」を中心に行われていましたが、今回新たに「3教科（国語、英語、数学）の学力」のみで受験できる方式や「体力評価+2教科」の方式など、新たな入試制度を設けます。いままでも、本学を志望する受験生が持ち合わせていた主体性、協働性に加え、知識・技能はもちろん、思考・判断・表現力の学力三要素を選抜できるように制度設計にしました。

近年、スポーツビジネスが拡大し、それに適応した人は企業からのニーズが高まっています。また、超高齢社会となって体育、運動そのものの意識・価値が高まっています。体育やスポーツ全般を理解して、マネジメント能力やコミュニケーション能力の高さを求められる人材がますます必要とされる時代になるでしょう。そこで、競技歴の高い人、全国レベル・世界レベルの実績がある人ももちろんのこと、高校時代には大きな結果を残せなかった人、本当に体育・スポーツが好きで人にも本学の門をぜひ叩いていただきたいです。

【入試・広報部部长、南直樹】

### NEW 総合型選抜（現：AO入試）の方式が多様に!

**体育学部 総合型選抜** [専願]

募集人員 スポーツ教育学科 **30人** / 健康・スポーツマネジメント学科 **20人**

アスリート型      自己推薦型

卒業生子女型      スポーツ科学研究型\*

\*新設のスポーツ科学研究型はスポーツ科学の研究に高い関心を持ち、入学後に研究活動に取り組む意欲を有する者が対象で将来、大学院進学などを目指す。

**教育学部 総合型選抜** [専願]

募集人員 小学校教育コース **10人** / 保健体育教育コース **10人**

自己推薦型      卒業生子女型

### NEW 特別総合型選抜（現：スポーツ特別AO入試）は2つのタイプに!

**体育学部 スポーツ特別総合型選抜** [専願]

募集人員 スポーツ教育学科 **97人** / 健康・スポーツマネジメント学科 **23人**

**体育学部 DASHアスリート特別総合型選抜** [専願]

募集人員 スポーツ教育学科 **3人** / 健康・スポーツマネジメント学科 **2人**

### 学校推薦型選抜（現：推薦入試）も従来通り実施!

**体育学部 学校推薦型選抜A（実技重視型）** [専願]

募集人員 スポーツ教育学科 **70人** / 健康・スポーツマネジメント学科 **35人**

**体育学部 学校推薦型選抜B（総合型）** [専願]

募集人員 スポーツ教育学科 **35人** / 健康・スポーツマネジメント学科 **45人**

**教育学部 学校推薦型選抜E** [併願]

募集人員 小学校教育コース **6人** / 保健体育教育コース **15人**

**教育学部 学校推薦型選抜F** [併願]

募集人員 小学校教育コース **24人** / 保健体育教育コース **5人**

### NEW 一般選抜（現：一般入試）は最大24併願が可能!

**体育学部 教育学部 一般選抜**

**A日程** 募集人員 スポーツ教育学科 **65人** / 健康・スポーツマネジメント学科 **60人** / 小学校教育コース **22人** / 保健体育教育コース **20人**

3教科型      高得点2教科型      体力評価・高得点2教科型      体力評価・高得点1教科型

**B日程** 募集人員 スポーツ教育学科 **20人** / 健康・スポーツマネジメント学科 **15人** / 小学校教育コース **4人** / 保健体育教育コース **3人**

3教科型      高得点2教科型

### A・B日程の併願方法について A・B日程の複数の入試方法・型を使い、可否を判定します

**合格のチャンスが広がる!**

入学検定料 **¥30,000**  
1併願あたり **¥5,000**  
学部・学科コースの併願が可能  
最大24併願受験可能

**例えば 英語と数学が得意で体力にも自信があるキミには!**

一般選抜 (高得点2教科型) + 一般選抜 (体力評価・高得点2教科型) + 一般選抜 (体力評価・高得点1教科型)

入学検定料 ¥30,000 + 2併願 ¥10,000 = **¥40,000**

**例えば 学力に自信があるキミには!**

一般選抜 (3教科型) + 一般選抜 (高得点2教科型)

入学検定料 ¥30,000 + 1併願 ¥5,000 = **¥35,000**

**例えば 体育が得意で勉強にも自信があるキミには!**

一般選抜 (3教科型) + 一般選抜 (高得点2教科型) + 一般選抜 (体力評価・高得点2教科型) + 一般選抜 (体力評価・高得点1教科型)

入学検定料 ¥30,000 + 3併願 ¥15,000 = **¥45,000**

**例えば 国語が得意で体力にも自信があるキミには!**

一般選抜 (高得点2教科型) + 一般選抜 (体力評価・高得点1教科型)

入学検定料 ¥30,000 + 1併願 ¥5,000 = **¥35,000**

**教育学部 一般選抜後期**

募集人員 小学校教育コース **4人** / 保健体育教育コース **2人**

# 企業採用は活況、公務員は安定した合格者を輩出！

## 公務員現役合格者延べ77人

平成30年度の公務員現役合格者が3月1日現在、延べ77人となった。内訳は国家公務員（刑務官・自衛官・法務教官）5人、地方公務員（警察官・消防官・行政職）延べ72人で、消防官は過去5年で最多の延べ34人の合格者を輩出し、法務教官は2年ぶりの現役合格となった。

昨年度の91人を下回ったのは、昨年度、閉学した健康福祉学部の公務員志望者と比べ、今年度完成年度を迎えた、教育学部学生の志望進路に変化があったため。教員への志望度が増したことで、警察官や消防官への進路希望が減少したとみられる。第一関門の筆記試験の突破を目標に、平成30年度卒の4年生は、これまでの公務員対策講座（週2回）、学習支援室との連携、フォローアップ面談に加え、論文対策講座（週1回）を行い、学力向上につなげた。

キャリア支援の特徴の一つである学内セミナーは、昼休みを利用する形で、企業等の人事担当者による説明会や、講義などを開催。例年、本学の学生を新規採用いただいている企業をはじめ、上場企業、福祉、医療、生涯スポーツなど、年度計110回超の回数を重ね、延べ1348人の学生が参加した。

近年は、体育会系の学生に対する評価が上がっていることもあり、本学の学生への各業界からの期待や、採用ニーズが一層高

まっているとみられる。現段階では、企業等に就職する者は286人（一般企業・スポーツ関連・医療・福祉・プロ実業団・自営業、3月1日現在）。キャリアアフエスタや、学内セミナーをきっかけに、進路を幅広く思索したうえで決定する学生も多い。

キャリア支援センターでは「学生自らがキャリアデザインを考え、自分の将来ビジョンを設計できるよう支援する」を目的に掲げ、1年生のオリエンテーションでまず、社会人の基本である挨拶の仕方やコミュニケーション能力のひとつである傾聴力を身につけることの重要性を教育する。その後は、社会の仕組みや業種・職種研究、社会人としての心構えや常識について学べる機会を提供することで、明確な目標を持って社会で活躍できる学生の育成を目指している。

恒例となっている全学あげてのイベントである「キャリアフェスタ」は、3年生対象を昨年9月に開催し、業界大手企業の人事担当者を招き、2日間で26の企業、団体、進学等のブースを設けた。学生は1日4ブースを回って、各業界を研究した。

1、2年生対象のものは2月に開催し、2年生対象は、各業界から内定・合格を勝ち取った4年生を招いての講演を実施。13のブースから4つを選択し、身近な先輩の話を聞いて自身の将来について考えるきつ

かけとした。1年生対象は、「将来について考えよう」をテーマに、梨田昌孝さん（NHK野球解説者）、上岡尚代さん（了徳寺大学准教授、本学19期卒）による特別講演を行った。梨田さんは「工夫・思考・先を予測する」という思考過程を、実際にボールを使

## 卒業後の進路目標を見据えて

### 1、2年生対象にキャリアフェスタ

卒業後の進路を考えるきっかけを与えることを目的に、1、2年生を対象にしたキャリアフェスタが、2月8日本学で行われた。

1年生は、プロ野球の近鉄、日本ハム、楽天で監督を務めた梨田昌孝さんと、本学の卒業生で、多くのスポーツでトレーナーとして活躍している上岡尚代さんの講演を聞いた。

2年生は、就職が決まっている4年生から、就職活動を通しての実体験や、アドバイスを聞いた。教員、消防、警察、商社、メーカーなど様々な仕事に就く、30人の先輩たちが後輩たちの前で、就職活動の心得や注意点を熱く語った。

今春から兵庫県赤穂市消防本部で任務に就く干飯啓晃さん（体育学部4年）は「目標へ向けての努力」について話し、巧みな話術で後輩たちから大きな拍手を受けた。「継続は力なり」が信条の干飯さんは、消防士を目指して、学習の習慣をつける

いながら野球と関連付けて説明。上岡さんは、自身のトレーナー活動での経験から「夢を実現するために、今できること」について話をした。

【キャリア支援センター、高津真人】

ことから始めたという。「最初は椅子に1時間座ることだけでもつらかった。勉強は辛かったが、苦ではなかった。周りにも頑張っている仲間が多かったので自分も頑張れ



キャリアフェスタでトークする梨田さん

た」と話し、夢を叶えるために自分を追い込み続けたと話した。

1日8時間に及ぶ勉強に、試験に合格するためのトレーニング量を増やし、1日1時間の休憩時間は、SNSやDVDで消防士の動画を見るなど、自分を奮い立たせる時間に充てた。こうした努力を積み重ねた結果、見事に夢をつかむことができた。

干飯さんは、講義の最後に「自分の夢に向かって全力で頑張れば、必ず実現できる。皆さんたちも頑張ってください」とエールを送った。先輩の熱いエールをもらった後輩たちは、感慨ひとしおの様子だった。

受講生たちに聞いてみた。



早崎千花さん  
(教育学部2年)

「教師一筋でなく、様々な業種を知った方が良い」との言葉で考えが変わった。講義を聞いているうちに、就活には多方向からの見方があることがわかった。教師になる勉強もしながら、他業種も調べてみたい。



東佑樹さん  
(体育学部2年)

進路が決まった先輩の、生の声が聞けたことは大きい。まだ、具体的な進路は決めていないが、先輩たちのおかげで将来がイメージできた。様々な企業の話聞いてみたい。

## 学長特別表彰、団体4、個人5

平成30年度の学長特別表彰が、1月24日行われ、ハンドボール部女子の世界選手権大会優勝メンバー、日本拳法の学生日本一別賞、学生会賞が贈られた。

岩上安孝学長は、受賞者をたたえた後、「練習サイクルに、他のクラブの練習方法を取り入れてみたらどうか。相互交流は図っているが、他のクラブの練習方法を取り入

れることで、新たな成果、新たな目標ができるだろう」と提言、さらにすべてのクラブの指導者に敬意を表した。

受賞者を代表して、なぎなた部の仕入愛梨さんは「なぎなたで日本一になりたくて大阪体育大学に進んだ。一層精進します」と誓い、日本陸上競技選手権大会のやり投げで3位になった大学院の中西琢真さんは「多くの人の支えと、院での研究の成果だと

思う。全日本、世界を見据えて頑張りたい」と力強くお礼を述べた。

受賞者は次の通り。

【団体】ハンドボール部女子 第24回世界学生選手権大会優勝(犀藤菜穂、服部沙紀、笠井千香子、中山佳穂)▽硬式野球部女子 第8回WBS C女子野球ワールドカップ優勝(大野七海)▽ハンドボール部男子 高松宮記念杯男子第61回日本学生ハンドボール選手権大会優勝▽ハ



学長特別表彰を受ける受賞者



お礼のあいさつをする仕入さん

ンドボール部女子 高松宮記念杯女子第54回全日本学生ハンドボール選手権大会優勝▽なぎなた部 第57回全日本学生なぎなた選手権演技の部優勝(仕入愛梨、福岡歩)【個人】エアロビック Suzuki World Cup 2018 FIG World Cup Tokyo International ▲15th FIG AEROBIC GYMNASTICS 出場(谷夏見)▽陸上競技部男子 第102回日本陸上競技選手権大会やり投げ2位(坂本達哉)▽第34回全日本学生拳法個人選手権大会 優勝(角野晃平)▽大学院陸上競技 第102回日本陸上競技選手権大会やり投げ3位(中西琢真)▽チアダンス THE DANCE WORLDS 2018 6位(柴山桃夏)

# 教育学部退職教員 最終講話

万感を胸に

# 時代のリアルを追い求めて

松崎教授退職記念講義

平成30年度末をもって定年退職する教育学部の4教員が3月6日、「これまでの教育・研究を振り返って」と題し、本学中央棟7階の大会議室で講話を行った。



上月准教授

授は、兵庫県芦屋市での小学校長時代に、児童を中心に



工藤学部長

長は、大学を卒業して出版社に就職したが、そこから



退職記念講義をする松崎教授

教育学部の松崎保弘教授は2月11日、大阪体育大学同窓会館アネックスで退

職記念講義を行った。2月は教育学部の集

【名誉教授、和田隆夫】

ニティの形成に尽力。市立図書館や、町の書店と連携した取り組みを披露した。本学教員となつてからは、学校教員を目指す学生たちに「子どもを統制するのではなく、内発的な動機付けのできる教師が求められている。そのためには自分の意見を持つことが必要」と指導し、時には熱が入り過ぎて叱り飛ばすこともあったという。教職員に向けて「そそっかしい私は、迷惑を掛けたこともあったと思う。支えて下さりありがとうございました」と感謝の言葉を述べた。



内藤准教授

授は、中学校教諭時代に身体的なハルディのある生徒や、精神的に不安定な生徒とかかわった経験を踏まえ、本学では教員志望の学生らに「寝ている子、やる気のない子をどうサポートするか。『反面教師でもいい』ぐらいの気持ちで、真摯に生徒と向き合わなくてはいけない」と伝えてきた。平成30年度の教員採用試験合格実績に触れ「大阪府教育委員会では『大団大旋風』が吹いたと言われている。学生を育てる仕事ができただけのもとても幸せだった。社会に巣立ってから輝いてほしい」と激励の言葉を贈った。



後上教授

幼少期に病気で左目を失った後上鉄夫教授は、ハンディのある子どもの支援教育が専門。障がいがあるながらも前向きに歩んだ自身のこれまでの人生を振り返りつつ、障がいにも負けず、自らの道を模索し、近距離で、視力に頼らずとも、取り組める柔道に邁進した自身の経験を語った。障がい児教育とは、教師だけでできるものではなく、最も必要な支援は「親に寄り添うこと」と言い、「大阪体育大学では、学生の強みを生かそうと心掛けてきた。様々な試みをさせていたが、ただただ、感謝です」と笑顔で述べた。



松崎教授と田部准教授のトークセッション

# 相馬ワールドに笑いと涙

## 最終講義



最終講義をする相馬客員教授

相馬卓司  
客員教授の  
最終講義は  
2月9日、  
D203教  
室で行われ  
た。当日は

土曜日であり、かつ体育学部はスキー実習であったにもかかわらず、淵本隆文・体育学部長をはじめとして、親交のある大阪芸大の田中亮太郎教授ら多くの教職員、卒業生が参集した。

OUHSジャーナル編集長の相馬客員教授は新聞記者から転じた。いつもの講義と変わらず気負いなく登壇し、淡々としたながらも、福島県人の優しさににじみ出た相馬スタイルで話し始めた。

まず甲府、長野、富山の地方支局の記者時代は、警察回りをしながら特ダネの「抜き」「抜かれ」の世界に身をおいて、抜かれっぱなしだったと笑いを誘ったあとで、運動部記者時代の大特ダネの話に続けた。

それは、1984年のロサンゼルスオリンピックでの現地取材である。開会式のリハーサルにもぐり込むや、開会式まで秘密のベールに包まれていたロケットマンのリハーサルの写真と記事を書き、毎日新聞の一面トップを飾った。

次に読者からの反響が大きく、たくさんの投書があった記事（1998年10月13日）のコピーが配付された。内容は相馬夫妻と愛犬の物語である。夫人がガン

で亡くなる前後の愛犬との交流と、その後、愛犬もガンで亡くなっていく話である。事実を丹念に積み重ねながら、生あるものすべてに対する愛おしさと、悲しみを相馬客員教授の優しさで包み込んだ名文である。さらに相馬客員教授は、仕事において現場が大切であること、新聞記事は臨場感が肝要であること、マスコミの報道は鵜呑みにせず、自分で考え判断することを伝授した。

時間が過ぎ、いつの間にか相馬ワールドに引き込まれた。そこに新聞記者の円熟した技をみた。

【名誉教授、和田隆夫】



現役の記者時代、神崎浩現教授を取材する相馬客員教授（左）

# 大阪体育学会を開催

## 本学キャンパスで

第57回大阪体育学会が3月10日、「体育・スポーツの未来を拓く科学の知恵」をテーマに本学D号館で開催された。公益財団法人「日本スポーツ協会」の森岡裕策常務理事が、「新しい時代にふさわしいコーチングの実現を目指して―日本スポーツ協会公認スポーツ指導者制度の改定―」と題して基調講演。その後は、本学の楠本繁生体育学部准教授、小菅萌・同と、スポーツを通じて青少年育成に取り組む「NPO法人I・K・O市原アカデミー」（大阪府大阪狭山市）の池上正理事長の3人が、大会のテーマに沿ってシンポジウムを行った。



森岡公認スポーツ協会の基調講演

森岡常務理事は基調講演で、日本スポーツ協会は1911年（明治44年）に加納治五郎氏を初代会長として設立した大日本体育協会を前身とし、昨年4月に日本体育協会から日本スポーツ協会に名称変更したことを紹介。文化としてのスポーツを大切に、清潔性、健全性、誠実性を意味する「スポーツ・インテグリティ」の確保を目指しているとした。指導者によるパワハラや競技団体の不正など反倫理的行為を追放し、最適なコーチングを目的としてコア・カリキュラムを作成。あらゆる年代、立場の人がライフステージに応じた多様なスポーツ活動ができるような土壌づくりを目指しており、「新しい時代のスポーツ指導者は、スポーツの価値と未来への責任を自

覚することが求められている」と述べた。シンポジウムで楠本准教授は、本学ハンドボール部女子を全日本学生選手権大会で6連覇に導いた実績から、「選手に目標を設定させ、選手の目線に合わせて指導することが選手自身のやる気を引き出す」と報告。池上理事は小学校を中心に全国の学校を回り、8年間で30万人以上を指導した経験から「子どもたちが『自分は何がやりたいのか、どうしたいのか』を自問自答し、納得してスポーツを楽しむことが潜在能力を引き出す」と述べた。リーダーシップについて研究している小菅准教授はリーダーをタイプ別に分類し、指示、命令ではなく対話と気付きを与える「メンターシップ」の重要性を解説した。会場の参加者からは「学校のクラブ活動はどうあるべきなのか」などの質問が出て、活発に質疑が行われた。



本学で開催された大阪体育学会

# スポーツ・アドミニストレーター集結

## 日本のスポーツを議論

全国大学スポーツ・アドミニストレーター会議が2月24日、本学で開催され、各地の大学から約20人が集まった。大学スポーツ・アドミニストレーター（SA）とは、大学スポーツの振興を目的として、具体的な個別の事業を考案して進めていく学内の実務担当者を指す。スポーツ庁の方針もあり、近年、SAを配置する大学が増えている。この日は、各大学の事例報告などが行われ、参加者は、情報を共有しながら、今後の方向性について話し合った。

本学のSAである、スポーツ局の浦久保和哉・統括ディレクターは、大学開学60周年となる2024年を見据えた「大体大ビジョン2024」や、トップアスリートと指導者の育成・サポートシステムの構築をを目指す「DASHプロジェクト」を紹介。昨春のスポーツ局開局に立ち会った経験から、組織体制についても報告した。

基調講演は、ハンドボール部女子の監督を務める楠本繁生准教授が行い、「やる気を育てる」をモットーに選手を導き、インカレ6連覇という、前人未到の記録を達成した道のりを語った。

公開デイスカッションでは、大阪体育大学ほか、順天堂大学、国士館大学、新潟医療福祉大学、鹿屋体育大学のSAが、各大学の取り組みを発表。地元から支援を受ける一方で、大学側は住民参加型のスポーツ体験の機会を提供するなど徹底した地域密着路線や、けがの防止指導と、障がい者スポーツ支援に力を入れる保健、医療系のアプローチなど、様々な着眼点が紹介された。



全国から大学スポーツ・アドミニストレーターが集まった会議



各大学による発表（左は浦久保統括ディレクター）

# これからの教師像とは

## 教育学部シンポジウム

大阪体育大学教育学部公開シンポジウムが3月2日、本学で行われ、新学習指導要領が目指す学校教育を軸に、教育関係者が活発に意見交換を行った。

第1部は、佐藤真・関西学院大学教育学部・大学院教育学研究科教授が、「新学習指導要領の趣旨を生かした授業づくりと評価——主体的・対話的で深い学びの実現に向けて——」と題して講演。「技術的に知識を覚え込ませるのではなく、あらゆるものを関連付けて、分野を越境する教科横断的な考え方で学力を育成していく必要がある」とし、「主体的、対話的な深い学びが求められていて、グループを作って子供たち同士で教え合うなど、他者と協働して学ぶというやり方も、取り入れられるようになってきた」とコミュニケーションを重視した学習の教育効果を説明した。

第2部は「これからの学校教育と教師像を求めて」のタイトルでシンポジウムが行われた。佐藤教授のほか、大阪府泉大津市立旭小学校の小川隆夫校長、大阪府教育庁の坂本俊哉・市町村教育室長、大阪体育大学教育学部の岡崎均准教授らシンポジストが、それぞれの立場から、学校現場の課題や取り組みについて述べた。急速な情報化や人口知能の出現などにより、社会の未来図が見えづらい中、これからの子供たちは予測できない事態に対応する「社会の変化に主体的に向き合う力」「膨大な情報の中から何が重要かを判断する力」が必要になると指摘された。教職員間の意識のずれを解消して、気持ちをまとめることや、不安を

抱えている保護者に寄り添う大切さの実例を踏まえた報告もあり、傍聴していた今春から教員となる本学の学生たちは、魅力ある学校づくりへの熱い思いを共有した。



佐野教授の講演



教育現場からの報告

# 伝統のスキー実習 総勢229人の学生が参加

## OBも指導に

今年度のスキー実習は、2月12日から16日までの5日間、長野県菅平スキー場で行われ、総勢229人の学生と、約50人の教職員、学生スタッフが参加した。1年生214人は例年通り「山喜荘」でお世話になり、今年度から上級生15人は、ゲレンデに近い「十ノ原」に分宿した。

初日は、班分けテストを行い、レベル別に24班に分かれた。1班を除く23班は、本学の教員が指導を行ったが、ここまでの数、学内教員でこれほどの数の指導者が揃うのは、大阪体育大学の特長である。これまでの伝統や、教員の理解と協力のお陰である。年々、スキー経験のある学生は減ってきており、1日目は、ブーツの履き方や、スキー板の付け方からのスタート。2日目以降は半日を使ってラングラウフ（クロスカントリースキー）を行い、ゲレンデ外の大自然へ出かけた。ラングラウフは滑るだけでなく、歩くことも斜面を登ることもできるため、新雪の中へ飛び込んだり、誰も滑っていない道を拓いたり、自然を満喫することができた。

また、2日目は摂泉会（大阪体育大学OB会）長野県支部会から、6期生の西村さんが、3日目には関東支部会から、4期生の下村さんが実習の激励に来ていただいた。

この5日間でスキー技術の向上、



ひと休みする学生たち

新たに仲間との絆を築けたことだろう。スキー実習でのさまざまな気づきを大学に持ち帰り、さらに充実した学生生活にして欲しい。

最後になりましたが、スキー実習にご協力いただいた先生方、職員の皆様に御礼申し上げます。

【スキー実習副主任、伊原久美子】

# 技術を吸収する学生

## ゴルフ実習

今年度ゴルフ実習が、3月4日から8日まで、学生33人が参加して、昨年度と同じ、三重県のCOCOPAリゾート白山ヴィレッジゴルフコースで行われた。春先にしては寒さの感じられる中での実習となったが、悪天候に悩まされた昨年度より条件はよく、学生たちは意欲的に取り組んでいた。指導は菅生と、現地ゴルフコース所属の谷岡達弥プロにご協力いただいで、分担して行った。

学生たちは、前期の授業を受講するか、関西地区でのゴルフ初心者プログラム受講を条件に参加することとなっているため、多くの初心者はいなかったものの、まだアイアンショットなども、ほとんどがミスショットという状態でのスタートだった。しかしそこはさすが体大生。2日目になるとアプローチショットや、パターなど、多くの技術をどんどん習得していった。

3日目にはラウンドプレーに備えて、いかにしてゴルフコースを滞りなく回り、「ファストプレー」に徹することができるかを、グループワークで検討。4、5日目のラウンドへの心構えを醸成していった。実際のラウンドでは通常のゴルフラウンドに比べると、かなりルールを緩めて実施したこともあり、学生たちは大変満足しているように見えた。来年度の実施に向けては、ゴルフ技術指導のプログラムは確定してきたので、ゴルフ場でのマナー指導などを、徹底していく必要があると思われる。

実習実施にご協力いただきました教職員各位にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

【実習主任、菅生貴之】



フォロースルーはどうか



参加者全員の記念撮影

# 新たな日本のスポーツと 体育科学を目指して

## 博士論文発表会

2018年度 第23回博士論文発表会が1月23日、L301教室で実施された。発表は浦井久子さんの「遅発性筋痛における繰り返し効果の発症機序に関する研究」と、清水正輝さんの「按摩が筋に及ぼす影響」の2題だった。翌週の1月30日には、第24回博士論文発表会が、同じくL301教室で行われた。発表は小田啓之さんの「アキレス腱断裂経験者のアキレス腱の力学的特性および筋・腱の機能特性」と、栗谷健礼さんの「フロントクロールススイミング選手のための肩関節筋力の臨床的評価法」の2題であり、本年度は合計4題の博士論文の発表がなされた。

この発表会後も、博士学位請求論文(dissertation)の提出、口頭試問(defence)と、まだまだ博士号取得への道のりは続くが、その緒に就いたことに、同じ研究者として敬意を表したい。博士後期課程在学中に、すでに大学教員等の就職が決まっている院生も少なくなく、教えながら学ぶことは、単にタイムマネジメントの難しさだけでなく、様々な点で容易ではなかったと察せられる。これらの審査等の手続きを経て、本学博士後期課程を修了すると、スポーツ科学研究の博士、PhD (Doctor of Philosophy)を取得することになる。PhDは直訳すると「哲学博士」である。大阪体育大学スポーツ科学研究科が扱

う研究は体育学、スポーツ・健康科学と広範囲に及び、その内容も基礎研究から応用研究まで広がっている。

今回の発表者が目指す学位は、所属する領域のみに通じる知に留まることなく、領域横断的な普遍的価値を持つ知(哲学)への探求が求められる。すでに多くの大学院OB・OGが博士の学位を取得し、大学教員や研究職等で活躍している。これらに続き、日本の体育・スポーツ科学の新たな地平を切り拓く人材が生まれることを確信した発表会だった。

【博士後期課程研究指導担当教員、土屋裕睦】



博士論文の発表をする院生

# 発表会は、ゴールではなく始まり

## 熱気であふれた修士論文発表会

2018年度、第29回修士論文発表会が、1月19日開催された。本学大学院は、5つの研究領域と、10の学問分野から構成されている。

今年度の修士論文発表会は、前島悦子研究科長の開会のあいさつから始まり、スポーツ史・哲学、スポーツマネジメント、スポーツ心理学、バイオメカニクス、教授法(指導方法学)、スポーツ栄養学など多岐にわたる学問分野から、12演題の発表が行われた。各演題の発表時間は10分間。2年間の研究成果を10分間という限られた時間に凝縮するために、大学院生はこの数日間、これまで最も濃密な時間を過ごしたのではないだろうか。その光景が演者の発表する姿から伝わってきた。

いずれの発表者も、会場の参加者へ、いかに丁寧に分かりやすく伝えるのかを、思い思いの方法で工夫を凝らしていた。各演題発表後の5分間の質疑応答の時間は、演者にとって力量が試される。フロアから多数の質問や意見が寄せられ、「待ってました!」と言わんばかりの質疑応答に、緊張の中にもうまく答えられて、満足げな笑みを浮かべて発表を終えた者もいれば、思うように自分の意見を伝えきれず、不完全燃焼で終えてしまった者もいた。いずれも心に残る1日になったはずだ。すべての発表を終え、今年度限りで退職する豊岡示朗特任教授の講評で閉会

となった。豊岡特任教授が最後に述べた「研究」の意味を発表者は胸に刻んだ。

また、修士論文発表会は、研究のゴールではなく、始まりでしかない。さらに物事の事象を突き詰めて真理を探究していただきたい。

最後になりますが、発表会の準備や、運営をサポートしていただいた教職員、助手、院生の皆様、当日の座長を引き受けていただいた先生方には、心より感謝申し上げます。

【研究指導担当教員、足立哲司】



やや緊張の面持ちで発表する院生

# 4年間の学びの集大成

## 体育学部卒論発表会

2018年度体育学部卒業論文発表会が、1月26日、午前9時から午後0時半にかけて、D201、D203両教室で行なわれた。

18の発表演題があり、学部生、大学院生、教員、学内関係者、学外者を含めて合計

135人の参加があった。今年度は発表演題数が昨年度より多かったため、2会場に別れて発表が行なわれ、聴衆の学生や、教職員との間で、活発な質疑応答がなされた。

発表内容は、体育・スポーツに関して多岐にわたった。学生が日頃取り組んでいる競技で出くわした疑問を説明しようとするもの、現代社会におけるスポーツの果たす役割の実態を知ろうとするもの、スポーツに取り組むアスリートや、一般の人々の態度を知ろうとするもの、身体の仕組みを知ろうとするものなど、興味深いテーマばかり。

プレゼンテーションの出来映えも良く、十分に準備して発表に臨んだことがうかがえた。

大学で専門的に学ぶこ



熱弁を奮う体育学部生

とに關して、自ら問を立て、その答えを真摯（しんし）に知ろうとする営みは、大学での学びの中核をなす。卒業論文はその集大成であり、本発表会では熱気が伝わってきた。

【教務委員長、工藤俊郎】

# 教育学部初の卒論発表会

## 多彩な題目そろろう

完成年度を迎えた教育学部初めての卒業論文発表会は、1月24日、31日の2日間、それぞれ3教室を使って行われた。同学部一期生にとっては、4年間の集大成ともいえる卒業論文で、206人（2人1組も含む）が、10分の持ち時間の中で発表し、教員や学生のフロアからの質問やアドバイスを受けていた。

発表は、ゼミごとに3人から6人1班になって行われた。「大学生のInstagram使用に関する要因分析」「SNSの危険性と賢い付き合い方について」など身近なこと、「日本とドイツにおけるスポーツ文化の違いに

ついて」日本の部活動のこれから」「教員の部活動指導と給与特別措置法」教員の労働時間と賃金のスレー」など部活動絡みに言及したもの、「児童・生徒から必要とされている教師とは」学校臨床心理学から考察」「高等学校における知的障がいのある生徒の発達支援に関する研究」など教員として取り組むべきことなど、多岐にわたった力作ぞろいだった。

発表の際、緊張する学生、持ち時間を気にする学生、フロアからの質問に戸惑ったり、余裕十分で答える学生など様々だった。



やはり緊張する卒論発表会



初の卒論発表会

# 大盛況！OУH Sスポーツ キャンブ15周年記念大会

2月24日の日曜日、大阪体育大学キャンパスで「OУH Sスポーツキャンブ」が開催された。今年で15周年を迎えたスポーツ体験型のイベントで、地元では本学の社会貢献事業として定着。15周年の記念大会として、今年は無料で開放された。

開会式の挨拶では、本学社会貢献センター長の富山浩三教授が「1日楽しく体を動かしましょう」と参加者に呼び掛け、チアリーディング部ジャスパーズが、華麗な演技を披露して盛り上げた。年齢に関係なく、運動を生活に取り入れ

てもらおうとの趣旨から、子供向けの企画と中高年向けの企画を用意。子供向けのイベントでは、地域の小学生約80人が、サッカーとテニスに分かれ、本学部活動の監督と部員らの指導の下、汗をかきながらボールを追い掛けた。中高年向けの催しには、約20人が参加。午前中は、池島明子教授のゼミ生による健康増進プログラムを体験し、午後はヨガに取り組んだ。

参加者からは「また、来年も参加したい」という声が多く聞かれ、指導に当たった教員と学生たちにも笑顔があふれた。



本学の学生たちと小学生と一緒にサッカー



テニスに挑戦する小学生

春の訪れを告げる熊取町の風物詩となった「くまとりロードレース」が3月3日、本学陸上競技場を発着点として行われた。全国各地から約1000人のランナーが参加し、早春の田園風景とさわやかな空気を満喫した。

10・55キロのクォーターマラソンには、356人が応募。「水源の森百選」「大阪みどりの百選」に選ばれている永楽ダムを周回するコースで、傾斜がきつく、走りごたえは十分。ジョギングを日課にしている健康ランナーから、一般のマラソン大会に参加するような実力者まで、幅広い層が参加して最後まで走り切った。

3キロを走る中学生健康ジョギングファミリーには、648人の応募があり、家族連れや、中学生の仲良しグループなどが、めいめいのペースでコースを駆け回った。優勝した男子中学生は、全力を尽くした達成感と優勝の喜びに満面の笑顔だった。

この大会は、熊取町政40周年を機に始まり、今年で29回を迎えた。大阪体育大学はその約半数の大会で施設を提供しており、熊取町の社会貢献、地域交流の一翼を担っている。最後尾や沿道でレースの運営を支えるスタッフや、大会を盛り上げる「着ぐるみ」で、本学の学生ボランティアが大いに活躍。また、本学のアスレティックトレーナーチームが、無料でアイシング、ストレッチを行った。

来年は第30回の記念大会となる。より多くの参加が見込まれ、熊取町と大阪体育大学が連携した健康と運動のイベントがさらに大きくなる。

## くまとりロードレース



早春を駆け抜けたロードレース



銘々にスタートする参加者たち

# 硬式野球部女子が創部10周年

大阪体育大学の硬式野球部女子が、創部10周年を迎え、2月17日、大阪市北区の「ホテルグランヴィア大阪」で記念式典を行った。青春時代にひたすら白球を追ったOGたちが集まり、現役部員や関係者と部の発展を誓い合った。

式典では、野田賢治理事長、岩上安孝学長、福知山成美高等学校女子野球部の長野恵利子監督が祝辞を述べた。横井光治監督は「次の5年先、10年先に向けて、1人で

も多くの方々から応援してもらえる部活動を目指しつつ、1日も早く日本一の報告ができるよう選手共々精進していきます」と力強く抱負を語った。

創部メンバーからの挨拶や、10年間で振り返るDVDの上映などがあり、参加者はこれまでの部活動を振り返って胸を熱くした。OG会からは「厳しく、楽しく！」と野球部のモットーが書かれた横断幕が記念品として贈られた。

会場にはこの10年間の成績を表すたぐさんのトロフィーや賞状が飾られ、高校生の憧れとなるような女子野球部を目指す思いを確認する式典となった。



賑やかに開催された記念式典



OG会から贈られた横断幕

## スポーツは 人を創る

SPORTS  
NURTURE  
HUMAN

**極める力。人を学び、育て、支える。**

### 大阪体育大学

OSAKA UNIVERSITY OF HEALTH AND SPORT SCIENCES

体育学部 教育学部

入試・広報部  
〒590-0496 大阪府泉南郡籠取町朝代台1-1  
TEL.072-453-7070 FAX.072-453-8970

**体育学部**

スポーツ教育学科 (3年次よりコース選択)

- コーチ教育コース
- 体育科教育コース
- スポーツ心理・カウンセリングコース

健康・スポーツマネジメント学科 (3年次よりコース選択)

- スポーツマネジメントコース
- アスレティックトレーニングコース
- 健康スポーツコース

**教育学部**

教育学科

- 小学校教育コース
- 保健体育教育コース

**大学院**

スポーツ科学研究科  
博士(前期・後期)課程

■ ホームページ  
<https://www.ouhs.jp/>

■ 入試情報サイト  
<https://www.ouhs.jp/nyushi/>

■ 大阪体育大学 クラブ動画

## コラム

## ボーシヤ

名誉教授 和田隆夫

## 決心のスーツケース

いくたび人生で決心できるものだろうか。

今回はスーツケースにまつわる話である。

数年前、ドイツのフライブルク大学で在外研究の機会があった。その折、翻訳家のS女史の知己を得た。夫はドイツ文学者で、既に亡くなられていた。独り身となった彼女は、自分の生きざまは自分で決めると、ドイツに渡航した。出会った頃は、滞独10年は過ぎていたと思う。伊藤左千夫の『野菊の墓』の翻訳はほぼ終わり、入稿間近だった。

知己を得られたのは、フライブルク大学同窓会のコネリー博士の紹介があったからだ。大学植物園での講演会の後に行われた、森のパーティー会場でのことだった。

これをきっかけに親しくお付き合いするようになった。妻がやってきてからは、家族ぐるみで交誼を結んだ。ある晴れた日、コネリー博士の運転で、ボーデン湖近くのヘルマン・ヘッセの邸宅を訪問したことがある。その道中、コネリー博士とS女史の友情は、知的かつ、清らかそのもので、ヘッセのイメージと重なるように時間は過ぎ、心に静かにしみた。

帰国間際に荷物がが増えて困っていると、S女史から「使わないから」と一個のスーツケースを提供された。

「帰国のとき不便でしょう」と尋ねると、

「もう帰らない」

それだけの会話だった。まさに他者を立ち入らせない、強靱な精神に触れた瞬間だった。

それから2年後、彼女はがんの放射線治療を受け始めた。しばらくは遺言に関する法的な質問メールが多かった。入退院を繰り返した。

3月にオーストリアを訪問する機会があったので、フライブルクまで足をのばし、お見舞をしようとメールをしたが、返事はなかった。訝しく思っていたとき、コネリー博士のメールで、彼女が昨年亡くなったことを知った。

「決心してこそ人たる」ことを、このスーツケースはぼくに迫り続けるだろう。



## 築立つ622人、院修了式、学部卒業式

平成30年度の大阪体育大学大学院修了式、大阪体育大学卒業式が3月19日、スターゲイトホテル関西エアポート国際会議場で行われた。大学院(博士前期課程、博士後期課程)15人、体育学部491人、教育学部116人の、合計622人が巣立って行った。■写真■

岩上安孝学長は式辞で「スポーツ分野への期待はますます高まっています。この学び舎での経験は必ず実社会で生かされ、人生の扉を開きます」と卒業生を励まし、「皆さんが旅立つ今日の社会は、インターネットや、スマートフォンが人と人を結ぶ主流となっていますが、情報化の中でも、フェイストゥフェイスのコミュニケーションの重要性を再認識し、人前できちんと自分の考えを述べ、真心を込めて会話をしてください」と温かい助言を贈った。

式典では、クラブ活動で活躍した学生や、学業優秀な学生の表彰も行われた。スポーツ活動で顕著な功績のあった大島鎌吉賞は、体育学部の菊池流帆さん(サ

ッカー部男子)、犀藤菜穂さん(ハンドボール部女子)、服部沙紀さん(同)、山本真奈さん(同)、中西麻由香さん(同)、仕入愛梨さん(なぎなた部)に贈られた。加藤橋夫賞には、学業で学年トップの成績を取った教育学部の山下奈々さんが選ばれた。このほか、スポーツ優秀賞53人、学業優秀賞19人、功績賞6人、優秀論文賞3人が表彰された。

卒業生の謝辞では、大学院生では稲垣就斗さん、大学体育学部では木戸裕生さん、同教育学部では山下奈々さんが、それぞれ総代を務めた。「少しでも多くのものを身に着けたいと努力してきた。これから出会うどんな困難にも立ち向かっていきます」「大学での学びや、実習などで得た多くの出会いが成長させてくれた」などと社会人となる決意を表明し、学生生活を支えてくれた教職員や仲間たちに感謝の言葉を述べた。最後は全員で学歌を斉唱し、卒業生らは、いよいよ新しい世界に漕ぎ出して行く期待に胸を膨らませていた。



## 窓

◆◆新入生の皆さん入学おめでとうございます。社会に羽ばたく人もいれば、皆さんのように入ってくるフレッシュユマン、ウーマンもあります。大阪体育大学は「文武両道」を目指すための環境は、十分に整っています。恵まれた環境を生かすも殺すも皆さん次第です。古代ローマ時代の詩人、ユエナリスは「健全なる精神は健全なる身体に宿る」という有名なセリフを残しています。(誤訳だとの説もありますが)◆◆4月には人事異動の季節でもあります。当ジャイナル編集室でも私相馬が退任、和泉かよ子にバトンタッチします。4代目となる和泉は、初の女性編集長です。助手の中村優志も起業家として独立します。スタッフの一員、松本直也は日刊スポーツの記者としてペンを奮ってくださるでしょう。◆◆私は毎日新聞記者から転じて13年間、在籍しました。在籍中に200号の記念特集号で本学出身の現役校長特集を組み、その多さに驚いたものです。教育学部の一期生と、体育学部から52人(延べ)が先輩たちの後に続きます。それにしても楽しい13年間でした。ご愛読ありがとうございました。新入生の皆さんもその手でジャーナルやスポーツを作ってみませんか。

【相馬卓司】

# 我が青春の記

教育学部講師

陳 洋明



## 人生を変えた一言

関東にある体育系大学に入学し、救急医学を中心に学んでいたが、もともと体育の指導者になりたかったため「もっと体育の指導法について学びたい」と思い、大学院へ進学し、後に恩師となる、体育科教育学を専門とする先生の研究室の門を叩いた。

私自身、小、中、高、大と陸上競技を続けていたため、陸上競技の指導法に興味があったが、恩師も陸上競技(走り高跳び)専門であり、陸上運動の授業づくりに関する研究の第一人者だった。自分にとってまさに理想の研究室だった。院生時代は、研究に取り組みながら、恩師による小学生を対象とした、走り高跳びの出前授業の補助を行う日々だった。跳躍種目専門の私の主な役目は、恩師の授業の最後に「はさみ跳びで1メートル50センチを跳ぶ」模範を見せることだった。「はさみ跳び1メートル50センチ」は、陸上競技の世界では大した記録ではない。しかし小学生にとっては「おおよそ自

分の身長の高さ(頭上を跳び越えられているような状況)であることから、模範を見せたあとは、児童から大喝采を受ける。陸上で培ってきた技能がこのような場面でも生かすことができるのかと思った一時だった。

ある日の出前授業のあと、恩師から模範跳びがうまく跳べていたことを褒められたことがある。私は「陸上の世界では、大した記録ではない」ことを告げたが、恩師はその後私の人生を変える一言を言い放った。「俺たちは体育科教育をやっているんだ。良い陸上の授業をするのが俺たちの仕事だ」と。自分は陸上の選手として成功した訳ではないが、「子どもたちに陸上の楽しさを伝える方法」を考えたり実践したりする仕事ならできると思い、研究者の道を志した。

この一言がきっかけで、自身の専門種目である走り高跳びの授業研究に没頭した。時には、大学院の同級生や先輩、後輩、助手まで

陸上競技場に引き連れて、考えた走り高跳びの教材を実践してもらったりもした。その成果があり、小学生に提供できる走り高跳びの教材を考えつき、それが今の研究のベースにもなっている。

恩師の何気ない一言が、今の自分を築いてくれたと思いい、その感謝の気持ち忘れず、これからも日々研鑽に励んでいきたい。



大学院2年生(2010年) ゲストティーチャーとして小学生に体育を指導する筆者



体育学部講師

村上なおみ



## 一心に愛すること

「一心に愛すること」ただそれだけで私の人生はハッピーだ。バスケットボールに出会った29年前、ボールに触れる毎日がとても楽しくて、上手くなりたい、試合に出たい、そんな気持ちで夢中になっていたことを思い出す。ここでの出来事すべてが私の人生の礎。そうして、ご縁があり、前任の中大路哲先生に誘われて大阪体育大学に進学した。振り返ればこの出会いと選択が私の人生を大きく変えたのかもしれない。

やるからには日本一。全国的に見ればサイズも能力もさほどなかったが、本気で日本一を目指して懸命に取り組んだ日々は、私の唯一自慢できる誇りである。このチームに甘さは微塵もなく、寮生活に始まり、授業は一番前で受講、1日千本のシュートを空き時間のすべてを利用してひたすら練習した。当時は

上下関係も厳しい時代、ここでは言い尽くせないほどの出来事に対して、先輩からいただいた教えは、今となっては私の支えとなっている。振り返れば、苦しいこと、つらいことの方が多かったけれど、バスケットボールに費やした時間や努力は、今の私を支えてくれるものであり、価値あるものとなっている。

まさか私が大学の教員となり、伝統あるチームの監督を任せられることになる人生など正直考えてもみなかった。そんな器もなければ能力もない。ただ、あるとすれば、一心にバスケットボールを愛し、母校を愛したということ。

これだけで私は刺激的な毎日、家族や学生とともに過ごすことが



左が筆者(大学2年)



バスケットボールに打ち込んだ学生時代 真ん中が筆者(大学4年)

できている。かわる全ての人に感謝し、まだまだ出発したばかりの私の人生、エネルギー豊富な学生とともに青春時代の真っ只中を自分らしく突っ走っていききたい。



# 極める力。

人を学び、育て、支える。

## 大阪体育大学

---

### 【大学院】

- スポーツ科学研究科  
博士（前期・後期）課程

---

### 【体育学部】

- スポーツ教育学科
- 健康・スポーツマネジメント学科

### 【教育学部】

- 教育学科

---

### 大学事務局

庶務部、教学部、入試・広報部  
キャリア支援部、大学院事務室

### 大学附置施設

図書館、スポーツ局、社会貢献センター  
情報処理センター  
スポーツ科学センター

### 支援組織

教養教育センター、キャリア支援センター  
教職支援センター、学習支援室  
学生相談室・カウンセリングルーム

---

<https://www.ouhs.jp>